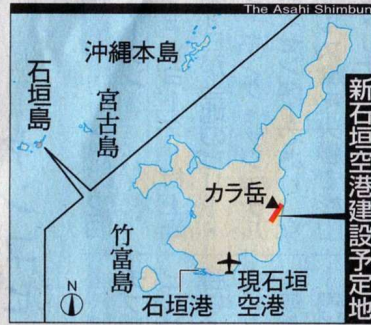


環境 エコロジー



希少コウモリ危機

新石垣空港 建設予定地

沖縄県・石垣島で建設が進む新石垣空港。その予定地内の洞窟で、絶滅の恐れがあるリュウキュウユビナガコウモリの妊娠中のメスが、専門家の学術調査で初めて見つかった。工事に伴い、赤土の流出も深刻な状態が続く。希少動物やサンゴ礁など、生態系への影響を懸念する専門家や市民団体は、反発の声を強めている。

(論説委員・大矢雅弘)

出産直前のメスを発見

「新空港建設がこのまま続けば、絶滅危惧種のコウモリ類の個体数の激減は確実」

7月中旬、研究者らでつくる「カラ・カルスト地域学術調査委員会」(代表、船越公威・鹿児島国際大教授)は、県などに工事の延期や繁殖調査などを求める要望書を提出した。

小型のリュウキュウユビナガコウモリは、環境省レッドデータブックで絶滅危惧種とされる。同委員会は6月上旬に現地調査し、洞窟の入り口で捕獲した6匹のうち、メス4匹すべてが出産直前だった。昨年6月にも別の洞窟で、保育中のメス1匹を捕獲している。

出産・保育洞と 県は認定せず

石垣島ではこれまで、その出産・保育場所は確認されていない。船越代表は「島内で唯一の

出産・保育洞では」と話す。だが、洞窟の一部は今年度中に壊される予定だ。

県新石垣空港課の栄野川盛信課長は「いずれも幼獣が見つかっておらず、出産・保育洞とは認めていない」と話す。幼獣確認のため、同委員会が追加調査の申請をしたが、県は不許可としている。

新空港の計画が発表されたのは79年。最初は白保海域を埋め立てる案だった。同海域には北半球最大といわれるアオサンゴ群落も生息しており、「貴重なサンゴ礁を守れ」という国際的に広がった反対運動でこの案は消えた。

その後、建設地は二転三転。白保から約5kmの陸上に決まったのは00年4月だった。だがこの予定地周辺には、国特別天然記念物で絶滅危惧種のカムムリワシなど、約230種の希少種が生息している。とりわけ、工

事で3種類の希少コウモリ類とサンゴ礁への影響が出るのが懸念され、05年に国土交通相が、沖縄県の環境影響評価(アセスメント)に追加調査を求める異例の注文をつけた。

同委員会の調査で、ある洞窟で一昨年夏に約1千匹いたリュウキュウユビナガコウモリが、昨夏は81匹に激減。同じく絶滅危惧種のエヤマコキクガシラコウモリが160〜510匹確認されてきた別の洞窟では、昨年3月の調査で2匹しか見つからなかった。

県は、希少コウモリの保全策として約1億円を投じ、昨年5月に全長約240mの人工洞窟を完成させた。県によると、この人工洞で最近、コウモリのフンが見つかった。だが、八重山諸島のコウモリの研究を約20年続ける山口大学の松村澄子准教授(動物行動学)は「偵察で飛ぶことはあるかもしれないが、洞窟内の温度や湿度が違いすぎて、出産、保育に使うとは考えがたい」と指摘する。

赤土の流出によるサンゴへの影響も心配されている。世界自然保護基金(WWF)ジャパンサンゴ礁保護研究センターが今春行った白保海域の赤土調査で、新空港予定地の南側海



①新石垣空港予定地内の洞窟で見つかった、妊娠したリュウキュウユビナガコウモリ=6月7日、カラ・カルスト地域学術調査委員会提供 ②沖縄県が設けたコウモリの人工洞窟の入り口付近=沖縄県提供

